山陽新聞 2026年3月3日(火) 文化 (9面)

風音

一貫して木材で表現

岡山県立大教授・南川さん　退職前に岡山で個展

「最終講義に代えて作品展を企画した」と話すのは、岡山県立大教授で木の造形作家の南川茂樹さん(65)＝岡山市北区一宮。3月末の退職を前に、同石関町のカフェ&ギャラリー「CCCSCD」とギャラリー「SoCo」で9年ぶりとなる個展を開いている。

CCCSCDで披露するのは「樹蔭―可逆―」。ヒノキの板を組み合わせた〝樹木〟が約20本、コンクリートの天井から伸びる。2013年には旧店舗で床から生えるように展開しており「反転させても森の中を歩くイメージとして成立すると考えた」。

一方のSoCoは「極相climax」。同じくヒノキで作った複数の〝植物のさや〟が、身を寄せ合うようにして立つ。そこから離れた一つのさやだけに〝種〟が入っている。極相とは植物群落が環境に合わせて変化し、最終的に安定した状態をいうが「さやの集まりはワイヤの力で成り立っている。人間が自然をコントロールしているようで、しきれていない状態を表現した」と話す。

SoCoで「極相climax」を披露する南川さん

東京都出身。宇都宮大、筑波大大学院でデザインを学び、学生時代から一貫して「他の素材よりしっくりくる」木材を扱う。東京学芸大助手などを経て県立大が開学した1993年に赴任。木の家具や玩具、インスタレーションなどを手がけ、林業の衰退による山林の荒廃を防ぐ手段として、作品を通じて間伐材の活用を提案するなど社会課題とも向き合ってきた。

岡山に来て30年余。「いつの間にか一番長く住み、地元と呼べる場所になった」と言い、退職後も岡山で創作に打ち込む考え。「アート性の高い作品には社会的メッセージを込めるべきと思ってきたが、そこに縛られすぎていたかも。もっと自由に、新しい表現にチャレンジしていきたい」

作品展は22日まで。4～9日には岡山市北区本町の岡山高島屋7階美術画廊でも家具などを展示する。(平松隆)

山陽新聞社提供
掲載の記事・写真及び、図版の無断転記を禁じます。